



福島県「集い」参加・視察報告

安曇野支部 青年・女性委員長 中山卓史

平成23年11月12日（土）に、福島県郡山市において「青年建築士の集い」が開催されました。東日本大震災を受けて行われた大会は、「大震災における建築士の役割」のテーマのもと、地元福島建築士会が66名、他県からは北海道から大分まで88名が参加し、総勢150名の大会となりました。

報告会では、震災の状況や仮設住宅への取組など、士会会員だけでなく行政担当者からも、行政側からの体験談を聞かせていただきました。発表者の中には、実際に原発の影響で20km圏内の家に帰れない方の話もあり、時折声を詰まらせながらの話は胸をギュッと締め付けられる思いでした。



震災時、自ら被災している中建築士として何ができるか、とても考えさせられたという話がありました。応急危険度判定業務、罹災証明調査を通し、建築士の一声によってどれほどの被災者が救われたか。建築士の役割とは、技術的な事も大事ですが、こういった心のケアという大事な役割があると感じます。そのことは実際に栄村派遣を通して感じた事でした。建築士の立場を再考させら

れます。

翌日は、福島建築士会大桃青年委員長の案内で2か所の仮設住宅団地を視察しました。

報告会で仮設住宅の取組の報告では、7万5千戸の供給が必要でプレファブ協会が2万戸、残りを木造住宅産業協会・全建連・日本ツーバイフォー協会・輸入住宅産業協会などで供給する配分となっています。1か所目の応急仮設住宅は震災後2カ月以内に一次供給3万戸の対象でプレ協で建て

られたものでした。応急性は良いものの断熱材が入っていない仮設住宅の中でも最も性能が悪いとのことでした。

2か所目の仮設住宅は、県産材を使ったもので全建連などが中心となって建てられたものです。

原発により帰宅のめどがたたない住民の方のお話を聞く事が出来ました。地震の恐怖、故郷への思い、想像以上の心労とストレスがある事を感じました。長期化しそうな仮設住宅生活にも、様々な問題がありそうでした。



仮設住宅視察の後、小名浜港へと向かいました。小名浜も津波の被害にあった漁港の一つです。

途中、道路の亀裂、段差、うねりも多少あり、屋根にシートが被さっている民家も見受けられました。しかし、津波以外の地震での被害自体はそう大きなものでないという印象でした。田畑も通常通りの感じでした。

小名浜港は、ほぼ被害の状況が分らない位復旧していました。漁港内でもごく普通に釣りをしている方が多く、日常生活そのものでした。

小名浜港では津波で2 m近く浸水したとの事でした。

漁港から、沿岸沿いに北へ向かうと、津波によって基礎だけが残されている住宅がたくさんありました。

未だ修復工事も各所で行われている中、今後の津波対策など問題点も多くありそうでした。そんな中、海岸ではサーフィンをやっている人もいて、自分が想像していた状況とはかなり差があると感じました。福島第一から約 50 km 圏内。自分であればどうとらえるか、想像もつきません。

最後に、栄村でもそうでしたが、報道などだけの情報でなく、実際に行ってみる事で分る事も多くあります。

福島も、色々な問題を抱えながらも前を向いて歩いて行こうと言う気持ちを感じました。内陸の方ではほぼ日常の暮らしと言う印象でしたが、見えない放射線との葛藤は住民にしか分からない辛い部分だと思います。

今回参加した資料等もありますので、またどこかの機会で見たいだけだと思います。

簡単ではありますが、御報告とさせていただきます。

